



東京都武蔵野市
クリーンむさしのを推進する会 白石 ケイ子 さん

Q 差し支えなければ、年齢と出身地を教えてください。

A 1936年、新潟の豪雪地帯生まれ。現在86歳です。

Q ごみ問題に関心をもつようになったのは何故ですか？

A 私の活動の出発点は、1971年当時に住んでいた国分寺市でPTAに誘われたこと。武蔵野市に転居したら、そこはあまりに古い体質のPTAだったのでPTA改革に動きまわりました。さらに高校増設運動に参加し、他校のPTAの人たちと知り合ったのは大きな収穫でした。

その後、埼玉県小川町で有機農業に取り組む生産者となつたり、農薬、化学肥料、そして環境問題へと関心が広がりました。

広瀬隆さんとの出会いも大きな転機になりました。スリーマイル島原発事故があった1979年頃、広瀬さんは西荻窪の駅前に立ち、原発の危険性を訴えるチラシを配っていました。本を出したいという広瀬さんの思いに賛同した人たち15.6人が集まって、当時西荻窪にあった「ほんやら洞」で勉強会や話し合いを重ねていきました。そして1981年に出版されたのが「東京に原発を！」です。

さらにそこに参加していた4人の女性たちで「私たちにできることは何だろう」と話し合った結果…「ほんやら洞のような店をつくって、来てくれる人といろいろなことを語りあっていたい」そんな思いで1983年三鷹の駅前に「みたかたべもの村」をつくりました。

テーブルや椅子、棚などは廃材で手作りし、キッチンの道具は学校の給食室で使わなくなったものをもらって使い、まるで山小屋のような店になりました。食材は、全国各地でさまざまな運動や取り組みをしている農家さんや漁師さんから仕入れて料理し、お客さんにその味を伝えていきました。

その後、17年間働いたたべもの村を後輩に託して、私は地元の武蔵野市に戻りました。さっそく「クリーンむさしのを推進する会」に入って、ごみ問題の活動を開始。生ごみを堆肥化し、2000年からはマイバッグ運動に取り組みました。

その4年後、まつりで使われる使い捨てプラ容器の減量に取り組み、「バガス(サトウキビ搾汁後の残渣)容器」の利用やリユース食器の使用に奔走しましたが、継続的な実施に至らず残念です。その時に作ったのぼり旗の「まつりには持って行こうよ、はし・皿・コップ」は私の目標であり、近い将来どんなまつりの場でもそれが当たり前時代の来るだろうと思っています。

Q ごみかんに入会して下さったきっかけは何ですか？

A 1996年12月、ごみ・環境ビジョン21の発足のきっかけとなった『三多摩発 アクションフォーラム～21世紀のごみを変える』が小金井市で開催され、その日はたべもの村をお休みして参加しました。そこからのつながりです。

Q ごみ問題に関わることで以外で趣味や生きがいは？

A 2010年、近所の商店街にある設計事務所のご厚意で貸していただけただけ1階部分で、週に1回、地域の人が気軽に立ち寄れる居場所「み

どりの縁がわ」をオープンさせました。数人で持ち寄るお昼ごはんを楽しみに来てくれる人は時には20人を越える賑やかさです。

最近、その商店街に若い人が「MIDORINO」というシェアキッチンのある創業支援の拠点をづくり、次々と新しい店が出店し始めています。

また若い設計士が商店会長になってから、元気がなくなっている商店街でまつりを盛り上げ、まつりの日はこどもたちとその家族で歩けないほどの賑わいになっています。週一回の駄菓子屋や月一回の子ども食堂も、「みどりの縁側」を使って開かれています。私たちも年が明けたら子ども食堂をやろうとはりきっています。

いま、さびれていた商店街が生れ変わりつつあるのを楽しんでいます。商店街の活性化を願って14年前から生ごみ堆肥を使って育てている花壇の花たちもうれしそうです。

Q 特筆すべき近況があれば教えてください。

A 近況とも言えませんが、2011年、福島原発事故が起きてしばらくは茫然として何も手つきませんでした。その年の9月に友人の呼びかけで月1回の脱原発デモをすることにし、吉祥寺・三鷹・武蔵境の3駅を順番に歩き、12月で114回になります。今年7月からはウクライナの平和を願う人達も参加して賑やかになりました。

以前ごみと・SUNでも報告した吉祥寺の商業施設コピスのウッドデッキで市長や環境省、時には東京都も参加して開催していた「マイボトル・マイカップキャンペーン」。コロナ禍で3年間開催できないでいますが、来年こそは復活させたいと思っています。